

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		
旧約聖書文学特殊研究 a	田中 光	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>特になし。	
<授業のテーマ> 詩編の原典での読解と聖書学的・神学的解釈。		
<到達目標> 詩編の言葉を原点や諸翻訳（古代語訳含む）によって丁寧に読み、その神学的メッセージを理解すること。ドクターの学生は特に、原典講読において幅広い古代語訳を読みこなし、同時に詩編の解釈の歴史についての理解を深めることができるようになることが目標である。		
<授業の概要> 各詩編を次のようなプロセスで読解していく。①詩編のヘブライ語原典の内容を精読し、本文批評的問題を BHS のアパタスその他によって確認する。②注解書その他によりながら、詩編の類型、歴史的背景、神学的メッセージなどについて討論する。		
<履修条件> ヒブル語の講義を受講して基礎文法を習得していることが望ましい。ドクターの学生は特に、第二外国語（英語・ドイツ語）を用いて幅広く文献を渉猟できる能力を身に付けていることが求められる。		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション&イントロダクション（＋詩編総論①） 第2回 詩編総論② 第3回 詩編 17 編① 原典の講読 第4回 詩編 17 編② 解釈に関する討論 第5回 詩編 18 編① 原典の講読 第6回 詩編 18 編② 解釈に関する討論 第7回 詩編 19 編① 原典の講読 第8回 詩編 19 編② 解釈に関する討論 第9回 詩編 20 編① 原典の講読 第10回 詩編 20 編② 解釈に関する討論 第11回 詩編 21 編① 原典の講読 第12回 詩編 21 編② 解釈に関する討論 第13回 詩編 22 編① 原典の講読 第14回 詩編 22 編② 解釈に関する討論 第15回 全体のまとめ		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は 180 分～240 分を目安とする。 事前に指示された予習（ヒブル語テキストの読解や参考書の読解）をきちんと行って授業にのぞむこと。ドクターの学生は、とりわけ解釈に関する討論の際には、できるだけ多く参考書を読み、議論となっているトピックについての幅広い知識を身に付けた上で、討論において中心的な役割を果たすことが求められる。		
<テキスト> 特に定めない。		
<参考書・参考資料等> 初回授業にて指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 各授業における予習・参加の度合いと、期末のペーパー（8000 字程度）によって評価する。評価は「共通評価指標：講義・演習」に基づいて行う。		

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		
旧約聖書文学特殊研究 b	田中 光	＜担当形態＞ 単独
後期・2 単位	＜登録条件＞特になし。	
＜授業のテーマ＞ 原初史（創世記 1－11）の原典での読解と聖書学的・神学的解釈。		
＜到達目標＞ 原初史を文献学的、神学的に解釈することができるようになること。ドクターの学生は特に、原典講読において幅広い古代語訳を読みこなし、同時に創世記の解釈の歴史についての理解を深めることができるようになることが目標である。		
＜授業の概要＞ はじめに原初史の解釈史を概観した後、原初史のテキストを原典（あるいは翻訳）で読み、且つ、注解書などによりながら解釈の討論をしつつ学びを深める。		
＜履修条件＞ ヒブル語の講義を受講して基礎文法をある程度習得していることが望ましい。ドクターの学生は特に、第二外国語（英語・ドイツ語）を用いて幅広く文献を渉猟できる能力を身に付けていることが求められる。		
＜授業計画＞ 第 1 回 オリエンテーション&イントロダクション 第 2 回 原初史の解釈の歴史 第 3 回 天地創造（創世記 1 章 1 節～2 章 4 節）① ヒブル語テキストの読解 第 4 回 天地創造（創世記 1 章 1 節～2 章 4 節）② 解釈に関する討論 第 5 回 エデンの園（創世記 2 章 4 節～3 章 24 節）① ヒブル語テキストの読解 第 6 回 エデンの園（創世記 2 章 4 節～3 章 24 節）② 解釈に関する討論 第 7 回 洪水までのアダムの子孫（創世記 4 章 1 節～6 章 8 節）① ヒブル語テキストの読解 第 8 回 洪水までのアダムの子孫（創世記 4 章 1 節～6 章 8 節）② 解釈に関する討論 第 9 回 洪水（創世記 6 章 9 節～8 章 22 節）①ヒブル語テキストの読解 第 1 0 回 洪水（創世記 6 章 9 節～8 章 22 節）②解釈に関する討論 第 1 1 回 洪水後の新しい秩序とノアの子孫（創世記 9 章 1 節～10 章 32 節）①ヒブル語テキストの読解 第 1 2 回 洪水後の新しい秩序とノアの子孫（創世記 9 章 1 節～10 章 32 節）②解釈に関する討論 第 1 3 回 バベルの塔とアブラハムに至る系図（創世記 11 章 1 節～32 節）①ヒブル語テキストの読解 第 1 4 回 バベルの塔とアブラハムに至る系図（創世記 11 章 1 節～32 節）②解釈に関する討論 第 1 5 回 全体のまとめと結論的考察		
＜準備学習等の指示＞ 1 回の授業あたりの授業外学習は 180 分～240 分を目安とする。 事前に指示された予習（ヒブル語テキストの読解や参考書の読解）をきちんと行って授業にのぞむこと。ドクターの学生は、とりわけ解釈に関する討論の際には、できるだけ多く参考書を読み、議論となっているトピックについての幅広い知識を身に着けた上で、討論において中心的な役割を果たすことが求められる。		
＜テキスト＞ 特に定めない。		
＜参考書・参考資料等＞ 初回授業において指示する。ここでは参考になる最近の著作を一冊を挙げておく（必ずしも購入しなくともよい） J. Blenkinsopp, <i>Creation, Uncreation, Re-creation: A Discursive Commentary on Genesis 1-11</i> (New York: T & T Clark, 2011).		
＜学生に対する評価（方法・基準）＞ 各授業における予習・参加の度合いと、期末のペーパー（8000 字程度）によって評価する。評価は「共通評価指標：講義・演習」に基づいて行う。		

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		
旧約聖書原典特殊研究 a	大島 力	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>	
<授業のテーマ> 第二イザヤ書（40－55章）の釈義的研究		
<到達目標> 受講生が、第二イザヤの思想をヘブライ語原典の構造分析によって解明していく方法を身につける。		
<授業の概要> イザヤ書45－49章に関して、語彙・文法的説明を基本に、文章構造とその思想を解明する。		
<履修条件> ヘブライ語文法習得者（中級以上が望ましい）。「旧約聖書原典釈義Ⅰa」と合同なので、釈義を深め討論をリードすると共に、自ら研究課題を見出し、まとめる姿勢が求められる。		
<授業計画> 第1回 ガイダンス 第2回 イザヤ書45：14－19 第3回 45：20－25 第4回 46：1－7 第5回 46：8－13 第6回 47：1－4 第7回 47：5－12 第8回 47：13－15 第9回 48：1－6 第10回 48：7－11 第11回 48：12－16 第12回 48：17－22 第13回 49：1－7（「主の僕の詩」第2詩） 第14回 49：8－13 第15回 49：14－21 総括		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 該当テキストの語彙的・文法的説明と、文章構造について考察をしておくこと。		
<テキスト> Biblia Hebraica Stuttgartensia(BHS)		
<参考書・参考資料等> F.Brown,S.R.Driver,and C.A.Briggs eds.,Hebrew and English Lexicon of the Old Testament.(BDB). L.Koehler and W.Baumgartner,The Hebrew and Aramaic Lexicon of the Old Testament.(HALOT). W.Gesenius,Hebräisches und Aramäisches Handwörterbuch über das Alte Testament,18.Auflage. その他、講義時に指定する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業における意見表明と研究課題レポート（6000字程度）。レポートは「共通評価指標：講義・演習」によって評価する。		

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		
旧約聖書原典特殊研究 b	大島 力	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>	
<授業のテーマ> 第二イザヤ書（40－55章）の釈義的研究		
<到達目標> 受講生が、第二イザヤの思想をヘブライ語原典の構造分析によって解明していく方法を身につける。		
<授業の概要> イザヤ書49－55章に関して、語彙・文法的説明を基本に、文章構造とその思想を解明する。		
<履修条件> ヘブライ語文法習得者（中級以上が望ましい）。「旧約聖書原典釈義 I b」と合同なので、釈義を深め討論をリードすると共に、自ら研究課題を見出し、まとめる姿勢が求められる。		
<授業計画> 第1回 イザヤ書49：22－50：3 第2回 50：4－9 （「主の僕の詩」第3詩） 第3回 50：10－11 第4回 51：1－8 第5回 51：9－16 第6回 51：17－23 第7回 52：1－12 第8回 52：13－15 （「主の僕の詩」第4詩 苦難の僕の詩） 第9回 53：1－6 （ ” ） 第10回 53：7－12 （ ” ） 第11回 54：1－8 第12回 54：9－17 第13回 55：1－7 第14回 55：8－13 第15回 総括		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 該当テキストの語彙的・文法的説明と、文章構造について考察をしておくこと。		
<テキスト> Biblia Hebraica Stuttgartensia(BHS)		
<参考書・参考資料等> F.Brown,S.R.Driver,and C.A.Briggs eds.,Hebrew and English Lexicon of the Old Testament.(BDB). L.Koehler and W.Baumgartner,The Hebrew and Aramaic Lexicon of the Old Testament.(HALOT). W.Gesenius,Hebräisches und Aramäisches Handwörterbuch über das Alte Testament,18.Auflage. その他、講義時に指定する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業における意見表明と研究課題レポート（6000字程度）。レポートは「共通評価指標：講義・演習」によって評価する。		

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		
聖書語学特殊研究 a	佐藤 泉	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>	
<授業のテーマ>旧約聖書原典の一部はアラム語で書かれており、古代訳の中にはアラム語訳旧約聖書のタルグムがある。そのようなアラム語のテキストを読むためのアラム語文法の基礎を学ぶ。マソラテキストとタルグムの比較を行う基礎を養う。さらに聖書の原典と古代訳との比較を行う。		
<到達目標>①アラム語文法の基礎を身につける。②身につけたアラム語文法の基礎を生かし、辞書も用いながら、聖書のアラム語のテキストや古代訳の一つであるタルグムを読むことができるようになる。③マソラテキストとタルグムや七十人訳等の古代訳との比較を行えるようになる。		
<授業の概要>聖書のアラム語のテキストを実際に読みながら（創世記31：47・エレミヤ10：11・エズラ4：8－24・5：1－17など）、アラム語文法を学ぶ。聖書の原典と古代訳との比較に慣れていく。		
<履修条件>ヒブル語履修済みであること。また、七十人訳等の古代訳との比較も行うので、ギリシア語等の文法の基礎を身につけていることが望ましい。		
<授業計画>		
第1回：序 アラム語について、言語グループ、時代区分などを話す。		
第2回：創世記31：47を読みつつ、アラム語の名詞・形容詞を学ぶ。		
第3回：エレミヤ10：11を読みつつ、動詞の Peal 形の完了・未完了を学ぶ。		
第4回：エズラ4：8－24の講読(1) 不規則変化の名詞について学ぶ。		
第5回：エズラ4：8－24の講読(2) 動詞の Hapel 形の完了を学ぶ。		
第6回：エズラ4：8－24の講読(3) 動詞の Peal 形の分詞、Hitpeel 形の完了・未完了を学ぶ。		
第7回：エズラ4：8－24の講読(4) 動詞の Pael 形の完了・未完了、Hapel 形の未完了を学ぶ。		
第8回：エズラ4：8－24の講読(5) 動詞の Hapel 形の分詞を学ぶ。		
第9回：エズラ4：8－24の講読(6) 動詞の Pael 形・Hitpeel 形・Hitpaal 形の分詞を学ぶ。		
第10回：エズラ4：8－24の講読(7) 二根字動詞の Peal 形と動詞の不定詞・命令を学ぶ。		
第11回：エズラ5：1－17の講読(1) 前置詞と代名詞語尾を学ぶ。		
第12回：エズラ5：1－17の講読(2) 二根字動詞の Hapel 形を学ぶ		
第13回：エズラ5：1－17の講読(3) 二根字動詞の Hitpeel 形を学ぶ。		
第14回：エズラ5：1－17の講読(4) Pê Yôd 動詞の変化を学ぶ。		
第15回：エズラ5：1－17の講読(5) Pê Nûn 動詞の変化を学ぶ。		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 講読箇所として指示されているアラム語テキストについて、できる範囲で準備すること。講読箇所について、マソラテキストのアパルトゥスや七十人訳等の古代訳にも注意を払うこと。		
<テキスト>Biblia Hebraica Stuttgartensia；Biblia Hebraica Quinta ー20ー Ezra and Nehemiah； Franz Rosenthal, A Grammar of Biblical Aramaic, Harrassowitz Verlag・Wiesbaden, 1995, Sixth, revised edition (テキストについては初回授業時に担当者が説明する。)		
<参考書・参考資料等>左近義慈編著、本間敏雄改訂増補『ヒブル語入門』[改訂増補版] 教文館、2011； William L. Holladay, A Concise Hebrew and Aramaic Lexicon of the Old Testament, Grand Rapids, 1971； Gustaf Dalman, Grammatik des jüdisch-palästinischen Aramäisch, Darmstadt：Wissenschaftliche Buchgesellschaft，1960； Gustaf Dalman, Aramäisch-Neuhebräisches Handwörterbuch, Göttingen：E. Pfeiffer，1938； Marcus Jastrow, A dictionary of Targumim, the Talmud Babli and Yerushalmi, and the Midrashic literature v1, v2, New York: Pardes, 1950		
<学生に対する評価（方法・基準）>予習・復習、積極的な授業参加の状況、講読箇所に関する発表、（講読箇所以外の）聖書のアラム語のテキストの中から指定された箇所に関する発表（あるいはレポート提出）、単語等に親しむための小テスト等によって成績をつける。なお、評価にあたっては、「共通評価指標：講義・演習」の①～④の内容を重視する。		

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		
聖書語学特殊研究 b	佐藤 泉	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>	
<授業のテーマ>旧約聖書原典の一部はアラム語で書かれており、古代訳の中にはアラム語訳旧約聖書のタルグムがある。そのようなアラム語のテキストを読むためのアラム語文法の基礎を学ぶ。マソラテキストとタルグムの比較を行う基礎を養う。さらに聖書の原典と古代訳との比較を行う。		
<到達目標>①アラム語文法の基礎を身につける。②身につけたアラム語文法の基礎を生かし、辞書も用いながら、聖書のアラム語のテキストや古代訳の一つであるタルグムを読むことができるようになる。③マソラテキストとタルグムや七十人訳等の古代訳との比較を行えるようになる。		
<授業の概要>聖書のアラム語のテキストを実際に読みながら（ダニエル書）、アラム語文法の学びを継続する。さらに、エレミヤ書などのタルグムの講読、聖書の原典と古代訳との比較もする。（箇所は未定。授業中に指示する。）		
<履修条件>ヒブル語履修済みであること。また、七十人訳等の古代訳との比較も行うので、ギリシア語等の文法の基礎を身につけていることが望ましい。		
<授業計画>		
第1回：ダニエル書の緒論的知識を確認し、前期の文法の復習をしつつ、ダニエル書の講読に備える。		
第2回：ダニエル書の講読(1) Pê' ālep 動詞の Peal 形を学ぶ。		
第3回：ダニエル書の講読(2) Pê' ālep 動詞の Hapel 形を学ぶ。		
第4回：ダニエル書の講読(3) 動詞の変化で音位転換が起こる場合について学ぶ。		
第5回：ダニエル書の講読(4) Lāmed' ālep・Lāmed Hē 動詞の変化を学ぶ。		
第6回：ダニエル書の講読(5) 二重' ayin 動詞の Peal 形を学ぶ。		
第7回：ダニエル書の講読(6) 二重' ayin 動詞の Hopal 形を学ぶ。		
第8回：ダニエル書の講読(7) 代名詞語尾付きの動詞の変化を学ぶ。		
第9回：ダニエル書の講読(8) 喉音を含む動詞について学ぶ。		
第10回：ダニエル書の講読(9) 特殊な変化をする動詞について学ぶ。		
第11回：エレミヤ書の緒論的知識とバビロニア方式の母音記号を確認し、タルグムの講読に備える。		
第12回：タルグムの講読(1) バビロニア方式の母音記号で読むことに慣れる。		
第13回：タルグムの講読(2) タルグムのアラム語の動詞の変化を学ぶ。		
第14回：タルグムの講読(3) アラム語文法を全体的に思い出しつつ読む。		
第15回：タルグムの講読(4) 原典や七十人訳と比較しつつ読むことを味わう。		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。講読箇所として指示されているアラム語テキストについて、できる範囲で準備すること。講読箇所について、マソラテキストのアパルトゥスや七十人訳等の古代訳にも注意を払うこと。		
<テキスト>Biblia Hebraica Stuttgartensia；The Pentateuch according to Targum Onkelos；The Former Prophets according to Targum Jonathan；The Latter Prophets according to Targum Jonathan；Franz Rosenthal, A Grammar of Biblical Aramaic, Harrassowitz Verlag・Wiesbaden, 1995, Sixth, revised edition（テキストについては初回授業時に担当者が説明する。）		
<参考書・参考資料等>左近義慈編著、本間敏雄改訂増補『ヒブル語入門』[改訂増補版] 教文館、2011；William L. Holladay, A Concise Hebrew and Aramaic Lexicon of the Old Testament, Grand Rapids, 1971；Gustaf Dalman, Grammatik des jüdisch-palästinischen Aramäisch, Darmstadt：Wissenschaftliche Buchgesellschaft，1960；Gustaf Dalman, Aramäisch-Neuhebräisches Handwörterbuch, Göttingen：E. Pfeiffer, 1938；Marcus Jastrow, A dictionary of Targumim, the Talmud Babli and Yerushalmi, and the Midrashic literature v1, v2, New York: Pardes, 1950；Theodore H. Robinson, Paradigms and Exercises in Syriac Grammar, 3 rd .ed., Oxford University Press, London, 1949.；Theodor Nöldeke, Compendious Syriac Grammar, Winona Lake, Indiana: Eisenbrauns, 2001.；J. Payne Smith, A compendious Syriac dictionary：founded upon the Thesaurus Syriacus of R. Payne Smith, Winona Lake, Ind.：Eisenbrauns，1998.		
<学生に対する評価（方法・基準）>予習・復習、積極的な授業参加の状況、講読箇所に関する発表、（講読箇所以外の）聖書のアラム語のテキストの中から指定された箇所に関する発表（あるいはレポート提出）、単語等に親しむための小テスト等によって成績をつける。なお、評価にあたっては、「共通評価指標：講義・演習」の①～④の内容を重視する。		

聖書神学専攻・新約聖書神学関係		
新約聖書原典特殊研究 a	遠藤 勝信	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>	
<授業のテーマ> ヨハネによる福音書 2：1～4：30 の原典釈義。ギリシア語新約聖書のテキストを歴史的、文学的、神学的文脈に基づいて解釈する方法を学ぶ。		
<到達目標> 学生が、テキストと真摯に向き合う姿勢を学びつつ、聖書釈義の方法を修得する。		
<授業の概要> はじめに近年のヨハネ福音書研究の動向（研究史、方法論）を概観し、釈義上の問題及び観点を確認する。その後、参加者による発表とディスカッション。釈義の正確さと共に慎重な議論の仕方、神学的掘り下げについて学び合う。		
<履修条件> 新約ギリシア語原典テキスト読解力を有すること。ギリシア語中級文法の知識があることが望ましい。		
<授業計画> I. 講義を中心に 第01回 研究史を概観し、近年の研究状況と釈義の諸問題を学ぶ。 第02回 ギリシア語新約聖書本文批評の実際。 第03回 テキストの文学批評の実際。 第04回 テキストと歴史批評の実際。 第05回 ヨハネ1章の概要 II. 演習（参加者による釈義の発表とディスカッション）を中心に 第06回 ヨハネ02：01～12の原典釈義 第07回 ヨハネ02：13～25の原典釈義 第08回 ヨハネ03：01～10の原典釈義 第09回 ヨハネ03：11～21の原典釈義 第10回 ヨハネ03：22～30の原典釈義 第11回 ヨハネ03：31～36の原典釈義 第12回 ヨハネ04：01～10の原典釈義 第13回 ヨハネ04：11～19の原典釈義 第14回 ヨハネ04：20～30の原典釈義 III. 総括 第15回 釈義演習の総括的な反省と展望。		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 クラスで取り上げる新約聖書テキストをギリシア語文法に則して読み、釈義の問題点を明確にしてクラスに出席すること。		
<テキスト> Nestle-Aland (28 th ed., 2012), <i>Novum Testamentum Graece</i> 各自で購入のこと。		
<参考書・参考資料等> R・ブルトマン著、杉原助訳『ヨハネの福音書』、2005年 R・A・カルペッパー著、伊東寿泰訳『ヨハネ福音書文学的解剖』2005年 R・ボウカム、浅野淳博訳『イエスとその目撃者たち』2011年 C.S. Keener, <i>The Gospel of John- A Commentary vol.1</i> , 2003.		
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業における発表と期末試験（指定されたテキストについての釈義ペーパー [8,000～10,000 文字]）。釈義ペーパーに、新約聖書学の基礎的理解及びテキストへの真摯な取り組みが反映されているかを評価。尚、出席が三分の二を満たさない場合、期末試験の受験を許可しない。レポートは共通評価指標：講義・演習によって評価する。		

聖書神学専攻・新約聖書神学関係		
新約聖書原典特殊研究 b	遠藤 勝信	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>	
<授業のテーマ> ヨハネの黙示録 11：11～14：13までの原典釈義。ギリシア語新約聖書のテキストを歴史的、文学的、神学的文脈に基づいて解釈する方法を学ぶ。		
<到達目標> 学生が、テキストと真摯に向き合う姿勢を学びつつ、聖書釈義の方法を修得する。		
<授業の概要> はじめに近年のヨハネ福音書研究の動向（研究史、方法論）を概観し、釈義上の問題及び観点を確認する。その後、参加者による発表とディスカッション。釈義の正確さと共に慎重な議論の仕方、神学的掘り下げについて学ぶ合う。		
<履修条件> 新約ギリシャ語原典テキスト読解力を有すること。ギリシャ語中級文法の知識があることが望ましい。		
<授業計画> I. 講義を中心に 第01回 イントロダクション。黙示録の文学ジャンル。 第02回 黙示録を読む前に（その1）：黙示録の周辺、背景理解。 第03回 黙示録を読む前に（その2）：構造と構成、神学。 第04回 黙示録を読む前に（その3）：他。 第05回 黙示録1章～11章10節までを概観し、釈義の営みにおける課題と観点を確認する。 II. 演習（参加者による発表とディスカッション）を中心に 第06回 黙示録11：11～19の原典釈義 第07回 黙示録12：01～06の原典釈義 第08回 黙示録12：07～12の原典釈義 第09回 黙示録12：13～18の原典釈義 第10回 黙示録13：01～10の原典釈義 第11回 黙示録13：11～18の原典釈義 第12回 黙示録14：01～07の原典釈義 第13回 黙示録14：08～13の原典釈義 第14回 黙示録14：14～20の原典釈義 III. 総括 第15回 釈義演習の総括的な反省と展望。		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 クラスで取り上げる新約聖書テキストをギリシア語文法に則して読み、釈義的問題点を明確にしてクラスに出席すること。		
<テキスト> Nestle-Aland (28 th ed., 2012), <i>Novum Testamentum Graece</i> 各自で購入のこと。		
<参考書・参考資料等> 佐竹明著『ヨハネの黙示録』（上・下巻）2009年 R・ボウカム著、飯郷友康・小河陽訳『ヨハネ黙示録の神学』2001年 R. Bauckham, <i>The Climax of Prophecy</i> , 1993. G. Beale, <i>The Book of Revelation</i> (NIGTC), 1999. D. Aune, <i>Revelation 6-16</i> (WBC), 1997.		
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業における発表と期末試験（指定されたテキストについての釈義ペーパー [8,000～10,000 文字]）。釈義ペーパーに、新約聖書学の基礎的理解及びテキストへの真摯な取り組みが反映されているかを評価。尚、出席が三分の二を満たさない場合、期末試験の受験を許可しない。レポートは共通評価指標：講義・演習によって評価する。		

聖書神学専攻・新約聖書神学関係		
聖書解釈学特殊研究 a	中野 実	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>とくになし。	
<授業のテーマ>新約聖書諸文書の釈義的分析を厳密に行うことを通して各文書に特有な神学思想について深く学ぶ。		
<到達目標>すでに学んできた聖書解釈の方法論に基づきながら、具体的なテキストの分析（今回はヘブライ書）を行い、新約聖書文書を学術的にふさわしい仕方理解、評価できるようになる。		
<授業の概要>ヘブライ書の緒論的諸問題を確認したのち、釈義的分析を通してヘブライ書の神学を明らかにし、それを神学的に評価する。		
<履修条件>とくになし。		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 序：歴史的諸問題 第3回 序：文学的諸問題 第4回 1章1～4節 第5回 1章5～14節 第6回 2章1～4節 第7回 2章5～18節 第8回 3章1～6節 第9回 3章7～19節 第10回 4章1～11節 第11回 4章12～13節、14～16節 第12回 5章1～10節 第13回 5章11節～6章3節 第14回 6章4～12節 第15回 6章13～20節		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 毎回課題テキストをギリシャ語で読むのみならず、該当する箇所について註解書を読んでもくる。日本語にとどまらず、外国語の注解書、しかもギリシャ語を前提にしている専門的な注解書を必ず数冊は読んでもくる。		
<テキスト>ギリシャ語新約聖書		
<参考書・参考資料等>必要に応じてクラスで指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）>出席が三分の二に達していない場合は、原則として評価の対象にしない。評価は、共通評価指標：講義・演習に基づき総合的に行う。特に、クラスの課題に対する参加（貢献）度（ギリシャ語のテキストの読解、注解書の参照など）を重視する。		

聖書神学専攻・新約聖書神学関係		
聖書解釈学特殊研究 b	中野 実	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>とくになし。	
<授業のテーマ>新約聖書諸文書の釈義的分析を厳密に行うことを通して各文書に特有な神学思想について深く学ぶ。		
<到達目標>すでに学んできた聖書解釈の方法論に基づきながら、具体的なテキストの分析（今回はヘブライ書）を行い、新約聖書文書を学術的にふさわしい仕方理解、評価できるようになる。		
<授業の概要>ヘブライ書の緒論的諸問題を確認したのち、釈義的分析を通してヘブライ書の神学を明らかにし、それを神学的に評価する。		
<履修条件>とくになし。		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 7章 1～10 節 第3回 7章 11～19 節 第4回 7章 20～28 節 第5回 8章 1～6 節 第6回 9章 1 ～10 節 第7回 9章 11～14 節 第8回 9章 15～22 節 第9回 9章 23～28 節 第10回 10章 1～10 節 第11回 10章 11～18 節 第12回 10章 19～25 節 第13回 10章 26～31 節 第14回 10章 32～39 節 第15回 まとめ		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は 180 分～240 分を目安とする。 毎回課題テキストをギリシャ語で読むのみならず、該当する箇所について註解書を読んでもくる。日本語にとどまらず、外国語の注解書、しかもギリシャ語を前提にしている専門的な注解書を必ず数冊は読んでもくる。		
<テキスト>ギリシャ語新約聖書		
<参考書・参考資料等>必要に応じてクラスで指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）>出席が三分の二に達していない場合は、原則として評価の対象にしない。評価は、共通評価指標：講義・演習に基づき総合的に行う。特に、クラスの課題に対する参加（貢献）度（ギリシャ語のテキストの読解、注解書の参照など）を重視する。		

聖書神学専攻		
博士論文指導演習聖書神学 a	各指導教授	＜担当形態＞
前期・0単位	＜登録条件＞博士論文指導演習聖書神学 b と通年で登録すること。	
＜授業のテーマ＞ 学生各自の研究課題に従い、文献の講読や討論などを通じて博士論文を作成する。		
＜到達目標＞ 世界的レベルの聖書学論文が書けるようになる。		
＜授業の概要＞ 各自の研究課題に沿って、諸文献の検討、論文のテーゼや構成・内容などについて指導教授と対話しつつ、博士論文の作成にあたる。		
＜履修条件＞ 博士課程後期課程に在学する聖書神学専攻者。		
＜授業計画＞ 各指導教授が年度初めに配付する「研究指導計画書」に拠る。		
＜準備学習等の指示＞		
＜テキスト＞		
＜参考書・参考資料等＞		
＜学生に対する評価（方法・基準）＞		

聖書神学専攻		
博士論文指導演習聖書神学 b	各指導教授	＜担当形態＞
後期・0単位	＜登録条件＞博士論文指導演習聖書神学 a と通年で登録すること。	
＜授業のテーマ＞ 学生各自の研究課題に従い、文献の講読や討論などを通じて博士論文を作成する。		
＜到達目標＞ 世界的レベルの聖書学論文が書けるようになる。		
＜授業の概要＞ 各自の研究課題に沿って、諸文献の検討、論文のテーゼや構成・内容などについて指導教授と対話しつつ、博士論文の作成にあたる。		
＜履修条件＞ 博士課程後期課程に在学する聖書神学専攻者。		
＜授業計画＞ 各指導教授が年度初めに配付する「研究指導計画書」に拠る。		
＜準備学習等の指示＞		
＜テキスト＞		
＜参考書・参考資料等＞		
＜学生に対する評価（方法・基準）＞		

組織神学専攻・組織神学関係		
教義学特殊研究 a	須田 拓	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>	
<授業のテーマ> 17世紀イングランドのピューリタン神学について、その論点と教義学的特徴とを理解する。		
<到達目標> 自由教会の起源と言ってもよいイングランド・ピューリタンの神学の概略を知り、自分の研究テーマと関連させつつ、日本の教会の伝統について深く考えることができるようになる。		
<授業の概要> 17世紀イングランドのピューリタン神学について、組織神学の観点から講義しつつ、博士後期課程の履修者による発表と意見表明を交えて進めてゆく。いくつかのトピックを取り上げた上で、現代神学と比較し、現代神学に対する意義について考える。		
<履修条件> 特になし		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 17世紀イングランドの教会と神学 第3回 救済論(1) アルミニウス主義と無律法主義 第4回 救済論(2) リチャード・バクスター（長老派）の場合 第5回 救済論(3) ジョン・オーウェン（会衆派）の場合 第6回 救済論(4) その他の神学者の場合 第7回 中間総括 第8回 三位一体論と聖霊論(1) ソツィーニ主義の主張 第9回 三位一体論と聖霊論(2) ジョン・オーウェンの場合 第10回 三位一体論と聖霊論(3) トマス・グッドウィン（会衆派）の場合 第11回 三位一体論と聖霊論(4) 急進的諸派の場合 第12回 教会論(1) 国教会体制の神学 第13回 教会論(2) ウェストミンスター会議の神学 第14回 教会論(3) 自由教会の神学 第15回 まとめ		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 それぞれの項目について、宗教改革者や現代の神学者の基本的理解を確認した上で、講義の最後にそれを踏まえて意見を述べられるようにしておく。		
<テキスト> 特になし		
<参考書・参考資料等> 授業において、必要に応じて指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業における発表と意見表明、期末のレポート（6,000字程度）によって評価する。評価にあたっては、共通評価指標に基づいて評価する。		

組織神学専攻・組織神学関係		
教義学特殊研究 b	須田 拓	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件> 学期毎の登録可	
<授業のテーマ> 予定論の諸相を学ぶことを通して、深い教義学の理解を持つことを目指す。		
<到達目標> 予定論について、現代神学にどのような議論があるのかを知り、自分の研究テーマと関連させつつ、自らこの問題について深く考えることができるようになる。		
<授業の概要> 予定論について講義を中心としつつ、博士後期課程の履修者による発表と意見表明を交えて進めてゆく。論点を整理した上で、現代の様々な神学者の議論を概観し、あるべき予定論の姿を模索する。		
<履修条件> 特になし		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 神学史における予定論 アウグスティヌスとカルヴァン、カルヴィニズムを中心に 第3回 予定論の論点(1) 選びと人間の自由 第4回 予定論の論点(2) 選びと三位一体 第5回 予定論の論点(3) 個人か集団か 第6回 選びと人間の自由(1) カール・バルトにおける恵みの選び 第7回 選びと人間の自由(2) ヴォルフハルト・パネンベルクの場合 第8回 選びと人間の自由(3) コリン・ガントンの場合、その他の神学者の場合 第9回 中間総括 第10回 選びと三位一体(1) カール・バルトの場合 第11回 選びと三位一体(2) ヴォルフハルト・パネンベルクの場合 第12回 選びと三位一体(3) その他の神学者の場合 第13回 選びと教会(1) ヴォルフハルト・パネンベルクの場合 第14回 選びと教会(2) ロバート・ジェンソンの場合、コリン・ガントンの場合 第15回 まとめ		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 毎回、授業で扱う人物の著作を事前に読み、講義の最後にそれに対する意見を述べられるようにしておく。		
<テキスト> 特になし		
<参考書・参考資料等> 授業において、必要に応じて指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業における発表と意見表明、期末のレポート（6,000字程度）によって評価する。評価にあたっては、共通評価指標に基づいて評価する。		

組織神学専攻・組織神学関係		
組織神学特殊研究 a 現代哲学特殊研究 a	神代 真砂実	<担当形態> 単独
前期・2 単位	<登録条件> 特になし。	
<授業のテーマ> 組織神学の代表的文献であるカール・バルトの『教会教義学』を学ぶことで、バルトの神学思想について深い理解を得、自分なりの評価を下せるようにする。		
<到達目標> ①バルトの神学的思惟の特徴を理解する。②バルトを通して、聖霊論・教会論・信仰論についての総合的な理解を身に着ける。③当該主題についてのバルト神学の貢献と問題点を理解し、自分なりの評価をレポートのかたちで説得力をもって表明できるようにする。		
<授業の概要> バルトの『教会教義学』から和解論（第一部）の聖霊論・教会論・信仰論にあたる部分（62・63 節）を学ぶ。テキストを精読し、その内容についての議論を重ね、また、適宜、解説を加えることで理解を深める。		
<履修条件> 前期課程との合同（並行）授業のため、後期課程の履修者は前期課程の学生よりも常に少なくとも一歩から二歩先んじた準備が期待されている。また、議論をリードする役割も求められる。		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 テキスト、3～16 頁（62 節 1. 聖霊の業） 第3回 同、17～34 頁（62 節 2. 教団の存在①） 第4回 同、35～48 頁（同②） 第5回 同、48～79 頁（同③） 第6回 同、79～94 頁（同④） 第7回 同、94～110 頁（同⑤） 第8回 同、110～129 頁（同⑥） 第9回 同、129～152 頁（同⑦） 第10回 同、153～178 頁（62 節 3. 教団の時） 第11回 同、179～196 頁（63 節 1. 信仰とその対象①） 第12回 同、196～212 頁（同②） 第13回 同、213～220 頁（63 節 2. 信仰の行為①） 第14回 同、220～247 頁（同②） 第15回 同、247～254 頁（同③）		
<準備学習等の指示> 1 回の授業あたりの授業外学習は 180 分～240 分を目安とする。 演習なので、必ずテキストをよく読んでから出席することはもちろんであるが、さらに、テキストの内容に関連する事柄について自分から積極的にリサーチし、考察し、問題点を整理しておくこと。		
<テキスト> カール・バルト、『教会教義学・和解論 I / 4 僕としての主イエス・キリスト 下』、井上良雄訳（新教出版社、オンデマンド）。		
<参考書・参考資料等> 授業の中で適宜、紹介するが、Geoffrey W. Bromiley, <i>An Introduction to the Theology of Karl Barth</i> 中の当該箇所についての記述には必ず目を通しておくこと。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業への参加度（議論におけるリーダーシップを含む）、小課題、および期末のレポート（本文 6,000 字以上）による。共通評価指標：講義・演習に準拠して評価を与える。		

組織神学専攻・組織神学関係		
組織神学特殊研究 b 現代哲学特殊研究 b	神代 真砂実	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件> 特になし。	
<授業のテーマ> 前期と同じ。		
<到達目標> ①バルトの神学的思惟の特徴を理解する。②バルトを通して、キリスト論（人性・職能・状態の問題）についての総合的な理解を身に着ける。③当該主題についてのバルト神学の貢献と問題点を理解し、自分なりの評価をレポートのかたちで説得力をもって表明できるようにする。		
<授業の概要> バルトの『教会教義学』から和解論（第二部）の「人の子の高挙」（64 節）の前半を学ぶ。テキストを精読し、その内容についての議論を重ね、また、適宜、解説を加えることで理解を深める。		
<履修条件> 前期と同じ。		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション、およびテキスト、3～17 頁（64 節 1. 和解論の別の問題①） 第2回 テキスト、17～33 頁（同、②） 第3回 同、34～53 頁（64 節 2. 人の子の帰郷①） 第4回 同、53～63 頁（同②） 第5回 同、63～88 頁（同③） 第6回 同、88～107 頁（同④） 第7回 同、107～129 頁（同⑤） 第8回 同、129～150 頁（同⑥） 第9回 同、150～169 頁（同⑦） 第10回 同、169～187 頁（同⑧） 第11回 同、187～211 頁（同⑨） 第12回 同、211～232 頁（同⑩） 第13回 同、232～253 頁（同⑪） 第14回 同、253～278 頁（同⑫） 第15回 まとめ		
<準備学習等の指示> 1 回の授業あたりの授業外学習は 180 分～240 分を目安とする。 他も前期と同じ。		
<テキスト> カール・バルト、『教会教義学・和解論Ⅱ／1 主としての僕イエス・キリスト 上〈1〉』、井上良雄訳（新教出版社、オンデマンド）。		
<参考書・参考資料等> 前期と同じ。		
<学生に対する評価（方法・基準）>授業への参加度（議論におけるリーダーシップを含む）、小課題、および期末のレポート（本文 6,000 字以上）による。共通評価指標：講義・演習に準拠して評価を与える。		

組織神学専攻・組織神学関係		
現代神学特殊研究 a	芳賀 力	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>博士課程後期に在籍する者	
<授業のテーマ>公共的真理としての福音は、啓蒙主義以降の世俗化した近代社会にあって私的な事柄に成り下がっている。どうしたらもう一度福音の権威を取り戻すことができるのか、その方途を探る。		
<到達目標>世俗化した文化の中にあっても、確信を持って福音的真理を宣べ伝えることのできる力を身に着ける。自分の博士論文のテーマと関連付けて、神学的認識を深めることができる。		
<授業の概要>分担してテキストの要約を発表し、提示されたコメントを手がかりに全員で議論する。博士課程後期の学生は、議論の全体をリードするよう、心がけてほしい。		
<履修条件> 組織神学専攻以外の人も履修することができる。		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 L.Newbigin『ギリシャ人には愚かなれど』 第1章 第3回 同上 第2章 第4回 同上 第3章 第5回 同上 第4章 第6回 同上 第5章 第7回 同上 第6章 第8回 L.Newbigin『宣教学入門』 第1章、第2章 第9回 同上 第3章 第10回 同上 第4章 第11回 同上 第5章、第6章 第12回 同上 第7章 第13回 同上 第8章 第14回 同上 第9章 第15回 同上 第10章		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 担当に当たっていない場合でも、前もって目を通しておくこと。		
<テキスト>L.Newbigin『ギリシャ人には愚かなれど』新教出版社、2007年。同『宣教学入門』日本基督教団出版局、2010年。教員がコピーを順次用意する。		
<参考書・参考資料等> 必要に応じて授業内で指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 学期末にレポートを提出する。共通評価指標：講義・演習のうち、特に②と④に基づいて評価する。博士課程後期の学生として、将来の博士論文作成に資するように、その関連を吟味する。		

組織神学専攻・組織神学関係		
現代神学特殊研究 b	芳賀 力	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>博士課程後期に在籍する者	
<授業のテーマ>ポスト・キリスト教時代にあつて、キリスト者は「寄留の他国人」であるが、そのような中で、公共の真理としての福音を物語る聖書の民の使命と課題について考える。		
<到達目標>非キリス教的な文化の中にあつても、確信を持って福音的真理を宣べ伝えることのできる力を身に着ける。自分の博士論文のテーマと関連付けて、神学的認識を深めることができる。		
<授業の概要>分担してテキストの要約を発表し、提示されたコメントを手がかりに全員で議論する。博士課程後期の学生は、議論の全体をリードするよう、心がけてほしい。		
<履修条件> 組織神学専攻以外の人も履修することができる。		
<授業計画>		
第1回	S.Hauerwas『平和を可能にする神の国』	第1章
第2回	同上	第2章
第3回	同上	第3章
第4回	同上	第4章
第5回	同上	第5章
第6回	同上	第6章
第7回	同上	第7章
第8回	同上	第8章
第9回	S.Hauerwas/W.H.Willimon『旅する神の民』	第1章
第10回	同上	第2章
第11回	同上	第3章
第12回	同上	第4章
第13回	同上	第5章
第14回	同上	第6章
第15回	同上	第7章
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 担当に当たっていない場合でも、前もって目を通しておくこと。		
<テキスト>S.Hauerwas『平和を可能にする神の国』新教出版社、1992年。同『旅する神の民』教文館、1999年。 教員がコピーを順次用意する。		
<参考書・参考資料等> 必要に応じて授業内で指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 学期末にレポートを提出する。共通評価指標：講義演習のうち、特に②と④に基づいて評価する。博士課程後期の学生として、将来の博士論文作成に資するように、その関連を吟味する。		

組織神学専攻・歴史神学関係		
神学史特殊研究 a	本城 仰太	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件> 特になし	
<授業のテーマ> 西方教会における信条の連続性と変化を研究する。		
<到達目標> 使徒信条成立史をたどりながら、教会の最初期の時代から中世の時代までの信条の連続性と変化を概観することができるようになる。また、一次史料を原典で読み、二次史料によって最新研究を用いる力を養い、関連する教理を論じられるようになる。		
<授業の概要> 毎回のテーマに関連するレジュメと史料を配布しての講義、学生による発表（一人当たり2回）、ディスカッションを行う。		
<履修条件> 特になし		
<授業計画> 第1回 ガイダンス、信条（symbolum）とは？ 第2回 聖書から信条へ 第3回 洗礼信条、信条の伝達（traditio）と復唱（redditio） 第4回 教父たちによる信仰の基準（regula fidei） 第5回 教会会議での信条（アレイオス論争とニカイア信条を中心に） 第6回 礼拝の中での信条（第三回トレド教会会議を中心に） 第7回 古ローマ信条（R）の発見、「自由主義神学」による信条研究 第8回 ヒッポリュトス『使徒伝承』と古ローマ信条（R）以前の信条 第9回 古ローマ信条（R）から地域信条への発展① 北イタリア型（異端対策のための付加） 第10回 古ローマ信条（R）から地域信条への発展② アフリカ型（「聖なる教会を通して」） 第11回 古ローマ信条（R）から地域信条への発展③ ガリア型（「聖霊によって宿り」） 第12回 「使徒信条」（symbolum apostolorum）の名称と使徒信条の伝説 第13回 信条の統一化の波（フィリオクエ論争とアタナシウス信条） 第14回 カール大帝による使徒信条としての標準化と西方教会での統一化 第15回 まとめ		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 教会史Ⅰ～Ⅱの関連する事柄や史料をよく復習し、関連する史料に触れておくこと。		
<テキスト> 特になし。必要な史料は授業中に配布、または指示する。		
<参考書・参考資料等> ケリー『初期キリスト教信条史』（服部修訳、一麦出版社、2011年）		
<学生に対する評価（方法・基準）> 講義の出席を前提とし、①授業での議論のリード、②授業での発表、③期末の論文によって、共通評価指標：講義・演習に基づいて総合的に評価する。		

組織神学専攻・歴史神学関係		
神学史特殊研究 b	本城 仰太	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件> 特になし	
<授業のテーマ> 東方教会における信条の連続性と変化を研究する。		
<到達目標> 古代から中世までの東方の七つの公会議（西方とも共通）での協議内容や決定事項をたどりながら信条の連続性と変化を概観することができるようになる。また、一次史料を原典で読み、最新研究を二次史料によって用いる力を養い、関連する教理を論じられるようになる。		
<授業の概要> 毎回のテーマに関連するレジュメと史料を配布しての講義、学生による発表（一人当たり2回）、ディスカッションを行う。		
<履修条件> 特になし		
<授業計画> 第1回 ガイダンス、信条と信仰告白の定義 第2回 エウセビオス『教会史』における「信仰」と「職制」 第3回 第一回ニカイア公会議（325年）における信条の連続性と変化 第4回 第二回コンスタンティノポリス公会議（381年）における信条の連続性と変化 第5回 エフェソ公会議（431年）における信条の連続性と変化 第6回 カルケドン公会議（451年）における信条の連続性と変化 第7回 第二回コンスタンティノポリス公会議（553年）における信条の連続性と変化 第8回 第三回コンスタンティノポリス公会議（680-81年）における信条の連続性と変化 第9回 第二回ニカイア公会議（787年）における信条の連続性と変化 第10回 教父思想の連続性と変化 第11回 三位一体の教理の連続性と変化 第12回 聖霊の教理の連続性と変化 第13回 キリストの位格の連続性と変化 第14回 信条の変化と「伝達」 第15回 まとめ		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 教会史Ⅰ～Ⅱの関連する事柄や史料をよく復習し、関連する史料に触れておくこと。また配布テキストをよく読んでおくこと。		
<テキスト> J. Pelikan, <i>Credo : Historical and Theological Guide to Creeds and Confessions of Faith in the Christian Tradition</i> , New Haven and London : Yale University Press, 2003 の第一章（Continuity and Change in Creeds and Confessions）（初回の授業で訳を配布する）。その他必要な史料は授業中に配布、または指示する。		
<参考書・参考資料等> ケリー『初期キリスト教信条史』（服部修訳、一麦出版社、2011年）		
<学生に対する評価（方法・基準）> 講義の出席を前提とし、①授業での議論のリード、②授業での発表、③期末の論文によって、共通評価指標：講義・演習に基づいて総合的に評価する。		

組織神学専攻・実践神学関係		
キリスト教教育特殊研究 a	朴 憲郁	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>特になし	
<授業のテーマ> キリスト教教育学の諸相を学び、その実践的意義を問う。		
<到達目標> 20世紀キリスト教教育学の経緯を考察した後、多宗教社会に対するその今日的意義を把握できるようになる。		
<授業の概要> 前世紀にキリスト教教育学が辿った諸局面を開示し、宗教多元化社会における神学的把握、戦後日本の宗教教育の問題を的確に捉えること、及び教育実践的展開の一例として、ティリッヒの<象徴教授法>を学ぶ。		
<履修条件> 後期課程履修生は前期課程履修生の議論を導くような発言を期待する。		
<授業計画> 第1回 20世紀キリスト教教育学の経緯と今日の動向ードイツ神学の脈絡において 20世紀における二大変遷 1. 弁証法神学に基づく教育思想 第2回 2. 新たなキリスト教教育学の台頭 (1)「宗教教育学」の神学的基礎づけ 第3回 (2)1970年代の新たな問題設定(視点の転換)ー共に生き、信じることを学ぶ (3)象徴教授法ーP. ビールの理論(第1巻、第2巻) 第4回 キリスト教教育学的問題としての福音と宗教 1. キリスト教教育学と組織神学との関係 2. 福音と世俗化世界との関係を巡ってーゴーガルテンの世俗化命題 3. シュタルマンにおける「ゴーガルテンの世俗化命題」の受容と教育学的展開 第5回 4. キリスト教教育における福音と宗教の関係 (1)エーベリングとキリスト教教育、(2)宗教授業の対象領域 (第3回から14回まで受講者が発表し、討論とコメントをする) 第6回 世俗化命題に代わる象徴理論ー再びP. ビール(1)(2)(3) 第7回 多宗教社会におけるキリスト教教育学の課題 キリスト教が他宗教を主題化する動機と型 第8回 諸宗教の世界ー神学的把握 第9回 学校における宗教教育、戦後日本の宗教教育の問題(1)(2)(3)(4)ー諸宗教間の共存から競合へ 第10回 今日の「象徴」教授法ーティリッヒの「宗教的象徴」を手がかりに(象徴理論への関心) 第11回 ティリッヒにおける宗教言語としての象徴の理論、E. ユンゲルの見解への一瞥 第12回 象徴の神学ー聖書的・キリスト教的諸象徴、その他ー 第13回 象徴教授法(1)真正な象徴への接近、(2)象徴と経験 第14回 象徴教授法(3)1980年代以降の象徴教授法の諸展開(要請される象徴教授法、その他) 第15回 全体的反省と総括		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分〜240分を目安とする。 全員、事前にテキストの当該箇所を目を通してディスカッションできる備えをする。後期課程履修生は質問や意見を用意して、議論の活性化を目指す。履修者は何度かテキストを発表し、その後に相互討論する。		
<テキスト> 朴 憲郁『現代キリスト教教育学研究ー神学と教育の間でー』日本キリスト教団出版局、2020年8月 テキストは学生各自が購入。		
<参考書・参考資料等> 授業の中で随時紹介する。		
<学生に対する評価(方法・基準)> 授業時の発表、討論への参加度、およびレポート(5,000字程度)によって評価する。 2/3以上の授業出席者を評価の対象とする。共通評価指標:講義・演習の①〜④の内容を重視する。		

組織神学専攻・実践神学関係		
キリスト教教育特殊研究 b	朴 憲郁	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>特になし	
<授業のテーマ> キリスト教教育学の諸相を学び、その実践的意義を問う。		
<到達目標> 現代のキリスト教教育学の重要な諸テーマを学ぶことにより、その実践的展開が可能となるようになる。		
<授業の概要> 今日の「家族」に対するキリスト教教育学的な考察、子どもの信仰の形成、聖書の基礎づけによる平和教育、信仰と教育の関係、信仰継承の意味と諸相を取り上げる。		
<履修条件> 後期課程履修生は前期課程履修生の議論を導くような発言を期待する。		
<授業計画> 第1回 今日の「家族」に対するキリスト教教育学的な考察ー一般的考察 第2回 家族と宗教の関係ー歴史的変遷 第3回 今日の家族状況におけるキリスト教教育の可能性、家族と信仰・教会との関係 第4回 家族のためのキリスト教教育学のモデル 第5回 福音による変革と形成ー - 子どもの信仰ー離別かモデルか (1) (2) (3) (4) (5) (6) 第6回 - 幼少期と老年期における知恵 第7回 - 平和と暴力ー平和の旧新約聖書の基礎づけ (1) (2) (3) 第8回 コメニウスの平和教育論 (extra) (参考書参照) 第9回 信仰と教育 - 聖書の信仰と子どもの尊重 (1) (2) 第10回 - 宗教改革の見解ー信仰の非教授性と学習の必要性 (1) (2) (3) (4) (5) 第11回 信仰継承の意味と諸相 「信仰継承」の否定的意味 (1) (2) (3) 第12回 「信仰継承」の積極的意味 (1) (2) 第13回 教会における信仰継承 (1) (2) 第14回 全体的反省 第15回 全体的総括		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 全員、事前にテキストの当該箇所に目を通してディスカッションできる備えをする。後期課程履修生は質問や意見を用意して、議論の活性化を目指す。履修者は何度かテキストを発表し、その後に相互討論する。		
<テキスト> 朴 憲郁 『現代キリスト教教育学研究ー神学と教育の間でー』 日本キリスト教団出版局、2020年8月 J.H. ウェスターホフ 『子どもの信仰と教会』ー教会教育の新しい可能性 新教出版社、1998年(2版) J.L. シーモア編 『キリスト教教育の現代的展開』 第3章:Ch. R. フォスター 「キリスト教教育と信仰共同体」新教出版社、1987年 テキストは学生各自が購入。		
<参考書・参考資料等> ・授業の中で随時紹介する。 ・朴憲郁 「コメニウスの平和教育のヴィジョン」、上野峻一・田中かおる 編著 『恵みによって生きる人間の形成』ーキリスト教教育の理論と実践ー<朴憲郁先生献呈論文集> 日本キリスト教団出版局、2018年3月 197～210頁		
<学生に対する評価(方法・基準)> 授業時の発表、討論への参加度、およびレポート(5,000字程度)によって評価する。 2/3以上の授業出席者を評価の対象とする。共通評価指標：講義・演習の①～④の内容を重視する。		

組織神学専攻		
博士論文指導演習組織神学 a	各指導教授	＜担当形態＞
前期・0単位	＜登録条件＞博士論文指導演習組織神学 b と通年で登録すること。	
＜授業のテーマ＞ 学生各自の研究課題に従い、博士論文のテーマを設定し、研究を深め、論文を執筆する。		
＜到達目標＞ 第一次文献の読解や第二次文献との対論などを通して、具体的に博士論文の部分的作成に寄与する。		
＜授業の概要＞ 各自の研究課題に沿って、諸文献の検討、論文のテーゼや構成・内容・表現などについて指導教授と対話しつつ、実際に博士論文の作成にあたる。		
＜履修条件＞ 博士課程後期課程に在学する組織神学専攻者。		
＜授業計画＞ 各指導教授が年度初めに配付する「研究指導計画書」に拠る。		
＜準備学習等の指示＞ 小まめに指導教授と面談し、アドバイスを受けるようにする。		
＜テキスト＞ 面談の中で指示する。		
＜参考書・参考資料等＞ 面談の中で指示する。		
＜学生に対する評価（方法・基準）＞ 博士論文の共通評価指標に従う。		

組織神学専攻		
博士論文指導演習組織神学 b	各指導教授	<担当形態>
後期・0単位	<登録条件>博士論文指導演習組織神学 a と通年で登録すること。	
<授業のテーマ> 設定したテーマのもとで、さらに研究を深め、論文を執筆する。		
<到達目標> 第一次文献の読解や第二次文献との対論などを通して、具体的に博士論文の部分的作成に寄与する。		
<授業の概要> 各自の研究課題に沿って、諸文献の検討、論文のテーゼや構成・内容・表現などについて指導教授と対話しつつ、博士論文の作成にあたる。		
<履修条件> 博士課程後期課程に在学する組織神学専攻者。		
<授業計画> 各指導教授が年度初めに配付する「研究指導計画書」に拠る。		
<準備学習等の指示> 小まめに指導教授と面談し、アドヴァイスを受けるようにする。		
<テキスト> 面談の中で指示する。		
<参考書・参考資料等> 面談の中で指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 博士論文の共通評価指標に従う。		